

ギデنزの構造化理論

——その展開，要点，および意義——

宮 本 孝 二

は じ め に

- 1 ギデنز社会理論と構造化理論の展開
- 2 構造化理論の構成と応用における要点
- 3 社会学原論としての構造化理論の意義

お わ り に

は じ め に

現代イギリスの代表的な社会学者の1人であるアンソニー・ギデنز¹⁾は、現在までに多くの著作を刊行してきた²⁾。その研究も盛んになり1989年以来、単著も含めて数冊のギデنز論の集成がイギリスで刊行され³⁾、後述するようにその一部にはギデنز自身による総括も収録されている。日本でも1970年代中葉から研究が始められ、現在までに数冊の翻訳も出されギデنز研究書も刊行されるに至っている³⁾。しかし、構造化理論の全体像も意義も十分明確にされたとはいまだ言いがたい。

-
- 1) 文末のギデنز著作リストを参照。なお、本文で言及する際には邦訳題（邦訳のないものは邦訳仮題）を用いている。
 - 2) 文末のギデنز論リスト参照。これらについても本文で言及する際には、筆者の邦訳仮題を用いている。
 - 3) 先駆的業績としては犬塚先による Giddens (1971) の訳と解説、市川統洋による Giddens (1973) の訳・解説、および市川による Giddens (1976) の書評（『慶応大学法学研究』1978年6月号）が特記される。筆者も文末の拙稿リストに見られるように、この10年間にいくつかのギデنز論文を発表してきた。

本稿では、ギデنز社会理論の研究、さらには社会理論一般の一層の発展のために、現時点でギデنزの構造化理論の要点と意義を明確にしておくことを目的とする。まず、主としてギデنز自身による総括に即して彼の社会理論の展開、その中で構造化理論の展開の経過と方向を確認しておく。次に、構造化理論の要点を概念と枠組の基本構成やその応用についてまとめる。そして最後に、社会学原論としての構造化理論の積極的意義を基礎的存在論、マクロ社会理論、パワー論の3点に絞って明示することにした。

1 ギデنز社会理論と構造化理論の展開

まず『ギデنزの構造化理論——その批判的評価』にギデنزが執筆している「構造化理論——過去、現在、未来」を参照しつつ、ギデنز社会理論の展開過程をまとめておこう⁴⁾。1938年生まれのギデنزは、早くも60年代初頭からレスター大学で教育・研究に携わってきたが、自殺論などの論文を発表していたものの⁵⁾、それほど多作ではなかった。しかし69年にケンブリッジ大学講師となり、初めての単独著作『資本主義と近代社会理論』を71年に出して以来の多作ぶりには目を見張るものがある。それらにおいて73年の『先進社会の階級構造』で提示した階級構造化の概念を一般化した構造化をキーワードに⁶⁾、積極的に理論構築、現代社会分析を展開してきたのである。まさに疾走するギデنز、増殖するギデنزと呼ぶにふさわしい。ただし、構造化という言葉はその著作すべてをカバーするものではないと彼は言う。古典理論研究、社会学史研究、現代社会学者論なども多く、また構造化理論を基盤としつつも、その概念や図式に過度に制約されることなく対象に即した分析を彼は展開しているからである⁷⁾。

4) “Structuration Theory: Past, Present and Future” この段落以下3つの段落はこの論文に基づいている。

5) たとえば Giddens (1977) にいくつか収録されている。

6) 構造化理論の展開における階級構造化理論の重要性については2章と3章で示している。

構造化理論の展開の過程は、構造化という概念を初めて導入した『先進社会の階級構造』を皮切りに、構造化理論の構築が本格的に開始される76年の『社会学の新しい方法規準』、問題圏の拡大が図られた79年の『社会理論の最前線』を経て、一応の総括がなされる84年の『社会の構成』に至る著作に示されている。彼自身が言うように、『社会の構成』がその全体像であり、以前の著作は補足的な位置に置かれる。特に『社会学の新しい方法規準』は、副題に示されているように「理解社会学（解釈的社会学）の共感的批判」という文脈に限定されていることに注意を喚起している。ギデنز論の中にはそれに限定して論じる傾向があるからであろうが、その後の展開を示す著作を検討せずに構造化理論それ自体を議論することはできないのである⁸⁾。

構造化理論はギデنز以外の社会学者にも応用されつつある。応用の方法としては、その概念群を問題発見や分析視点の道具として柔軟に使用するものを彼は好んでいる。構造化理論の全体を厳密に組み上げられた理論として、それをそのまま特定の限定された対象領域に対応させようとする研究は、適切ではないと彼は考える。方法が認識を制約するのを忌避するのである。そして、この「構造化理論——過去、現在、未来」の最後で社会学の現状と未来について、反省性をキーワードにしつつ、運動の重要性を指摘している。社会学は現代社会の反省的意識なのだが、それは社会の反省性を担う運動と密接に関連する。現代社会の構造と変動について、それを人間存在との関連で分析するマクロで批判的な社会理論の展開を彼は推進しているといえる。さらに宗教研究の重要性の指摘と今後の研究を予告しているが、それも現代社会におけるアイデンティティの問題という文脈のものであり、90年の『モダニティの帰結』でその問題の検討が開始され、91年には『モダニティと自

7) たとえば Giddens (1989) のような社会学概説書でも構造化理論の概念は顕在的ではない。

8) 今枝法之『ギデنزと社会理論』1990年、日本経済評論社もこの難点をかかえている。同書に対する批判は拙稿「書評」『ソシオロジ』第36巻第1号、1991年、および宮本 (1991a)。なお以下の注でも何点か示してある。

己アイデンティティ』が刊行されている。

さて、ギデنزは多くの批判を受けているのだが、どう応答しているのだろうか。この『ギデنزの構造化理論——批判的評価』でも6人の論者が、構造化理論の基盤となったアメリカ的伝統、フランス的伝統、ドイツ的伝統との関連、社会変動論・国家論、時間・空間概念の使い方、対話モデルについて検討を加えている。ただ、この本では前述のようにギデنزは回顧と展望を示すだけで、それらの批判には直接反論していない。それは次の2つの論文で行っているからである。ギデنز論を集成した著作として最初のものである89年の『現代社会の社会理論——ギデنزと批判者たち』に、ギデنز「批判に答えて」を発表し⁹⁾、また『アンソニー・ギデنز——合意と論争』にも「構造化理論と社会学的分析」を執筆して¹⁰⁾、社会理論発展の方向を明示する努力をしているのである。

「構造化理論と社会学的分析」では、彼自身が批判点を7つの項目に簡潔にまとめた上で、それらのすべてに反論し、修正の必要はないと言い切っている¹¹⁾。そして、さらに理論を発展させる方向で、システムと変動についての分析枠組、モダニティの変動分析の概念としての時間・空間と反省性、機能概念を意図概念によって代替する可能性、社会学的分析のために構造化理論が提示する視点について議論を展開している。なお7つの批判点とは次の通りである。①構造化理論は概念図式の抽象的展開にすぎず、それ自体は無意味で経験的な社会研究に応用できない。②構造化理論は社会的拘束条件の問題を適切に扱えず、構造と行為は二元論にとどまっている。③機能主義や進化論はすでに死亡宣告が出されており、なぜその否定に多くの時間を費やすのか。④時間と空間についての議論は特に明析でもなければ一貫性もない。⑤社会理論のための有用な認識論を提示しておらず、知識が文脈的で歴史的

9) "A Reply to My Critics"

10) "Structuration Theory and Sociological Analysis"

11) Clark et al. (1990), p.300.

であることも見ていない。⑥生産力の拡大を社会発展の原動力とするマルクス主義的原理を否定している。⑦国民国家の発展の分析において、歴史的変動のコンティンジェンシーを適切に扱えておらず、また、監視を強調しすぎて官僚制や議会の中心的な役割を軽視している。

以上の点は「批判に応えて」において、より詳細に議論されている。そこでの論点もほぼ同様に、構造概念、マルクス主義・機能主義・進化論、国家と市民権、国家と戦争、性差問題と社会学、批判理論、構造化理論と経験調査の関連である。性差問題と社会学が目新しい論点であるが¹²⁾、彼の著作がそれに十分対応しうると主張している。もちろん構造化理論の要点についても自説を貫く。まず、構造化理論が実証される必要のある仮説的な説明理論ではないことは認めるが、それでも理論の自律性はあるし、経験的な社会研究を駆動する効果もあると主張する。たんなる抽象的な概念図式にとどまらない理論的意義もあれば、経験的研究を刺激する視点も提供しうるというわけである。また、資源と規則から成る構造と、そのような構造と主体・行為の関連を把握した構造の二重性（二元性と訳されることもあるが二元論批判という意図を生かすならば二重性の方が適切）¹³⁾の概念についての批判に対して彼は、拘束性と同時に成立する可能性、資源と規則の区分、規則の二つの種類の区分、資源と規則の関連、行為・相互行為における資源・規則の使用といった視点を堅持する¹⁴⁾。

さらに重要なことは、時間・空間が80年代の構造化理論にとって理論展開の基軸概念となっている点だ。もちろん従来 of 視点と断絶しているわけではなく、『史的唯物論の現代批判』や『国民国家と暴力』において、パワーも時空遠隔化（距離化と訳されることもあるがパワーの包括的拡大を示すダイナミックな概念なので遠隔化の方が適切）として定義される¹⁵⁾。時間と空間

12) 宮本 (1990b)。

13) duality of structure.

14) この点は2章で今少し詳しく述べる。

15) time-space distanciation.

については、その概念が十分に生かされていないと批判されるが、彼はそれに対して、存在の属性として時間・空間を位置づけていることを強調しており¹⁶⁾、また、90年の『モダニティの帰結』などでもそれがモダニティ分析の鍵概念の1つになっている。

この構造化理論は既成の立場に批判的である。それは「理解社会学（解釈的社会学）の共感的批判」として提示され始めた¹⁷⁾。行為主体の主観的意味を重視する立場を認めつつ、解釈学の重視する意味規則の構造や、機能主義に見られる規範とその正当化構造やマルクス主義に見られる権力と支配構造を相互関連的に組み込んだ理論の構築が目指されたのである。またマルクス主義、機能主義、進化論的発想に批判的なのは、マルクス主義のような一元論は無意味であり、社会を実体化するある種の機能主義的議論は根拠がなく、実体化された社会が一定方向に進化するという進化論的発想も無益であるからである。なお、マルクス主義批判の主要論点は、それが政治的パワーと経済的パワーの区別と関連を把握していないことに求められる。だからこそギデنز氏は『社会理論の最前線』で提示した構造化理論の基本図式において、資源構造を配分化と権威化の2次元で設定したのだ¹⁸⁾。この発想が『史的唯物論の現代的批判』や『国民国家と暴力』に全面展開されている。

このようにギデنز氏はマクロな社会理論、すなわち構造と変動の理論の発展を目指す。実証主義批判の眼目は単に主観主義の強調を対置することではなく、方法に制約されることの拒否といえよう。実証主義批判を『社会学の新しい方法規準』で提示された二段階の解釈学の文脈だけに固定すると誤解を生じる。マートンの理論概念（中範囲の理論）を批判するのは¹⁹⁾、実証主義に拘束されると、何よりもマクロな理論展開が困難になるからであり、主

16) Clark et al. (1990), p.299.

17) Giddens (1976).

18) 構造化理論の基本的な論点を議論する場合、この区別は不可欠であるが、構造化理論の展開を十分に押さえていないまま議論されることがある。たとえば今枝、前掲書の紹介にはこの区別が欠落している。

19) Giddens (1987), pp.41-44.

観主義の立場から一面的な相対主義を主張しているわけではないのだ。ともあれシステムと変動を把握するマクロな視点は、運動を重視する視点、さらに反省性を重視する視点とも関連する。構造という条件下でシステムが成立するが、それは組織や運動という反省性をもつ集合的な行為主体によって維持され変革されるという視点だ。『社会の構成』で示されたマクロ社会理論の展開の基本方向が確認され定着されていると言えよう²⁰⁾。

ギデنزには彼への批判にすべて反論する。自分自身の発展の可能性を信じ、彼はさらに飛躍しようとしている。コーザーが指摘する通り、彼は花から花へとびうつる蜜蜂さながらに、多彩な議論を展開し重要なテーマと取り組む²¹⁾。そこには一貫性が欠けるかのように見える。しかし、何か厳密な理論体系としての構造化理論があって、その厳密な適用として現実分析があるといった偏狭な視点では、疾走し増殖するギデنزには捕捉できはしないのだ。多少の混乱、誤謬、未整理があっても、それ以上に学ぶべき点が多い。我々がそこから十分に学ぶためには、ギデنزの著作の丁寧な理解と、そこに意義を見だし発展させる姿勢が必要である。もちろん批判を拒否するのではなく、ギデنز理論とその批判をそれぞれ正確に理解した上で対照させ検討しなければならない。そのためにも多くのギデنز論を検討し、多様な論点を明らかにする議論を活発化することが今後の課題となる。だからこそ構造化理論の要点と意義の正確な把握が求められるのである。

2 構造化理論の構成と応用における要点

構造化理論はギデنزの社会学原論である²²⁾。社会学原論は社会学の概念と対象を特定の視点から体系的に構成したものだ²³⁾。すなわち行為主体、行

20) 宮本 (1988b)。

21) Coser, L.A., "Review of Central Problems in Social Theory by Anthony Giddens", AJS., 1986, No.6.

22) 千石好郎「ギデنزの挑戦」徳永・鈴木編『現代社会学群像』1989年、恒星社厚生閣。

23) 拙稿「社会学の理論体系」『桃山学院大学社会学論集』23巻1号、1989年。

為、相互行為、構造、変動などという基礎概念の内容規定と相互連関、および社会学の対象となる多種多様な社会現象の基本構成と相互連関が、特定の視点を選択することによって体系的に把握されることによって原論が成立する。それでは構造化理論はいかなる視点なのか。

構造の二重性という視点、および相互行為と構造の関連づけを示す3次元図式が基軸をなす²⁴⁾。前者は構造が行為・相互行為の条件であり帰結であるという二重のありかたを示す。構造とは行為・相互行為の中においてのみ成立する、それ自体は虚像的な存在なのだ。しかし、同時にそれは行為・相互行為に強力に作用することによって条件として確固として存在する。この虚像的にして強固であるという構造のパラドクシカルな特性、行為・相互行為を制約するが同時にそこにおいてしか存立しえないという構造の特性の把握こそ、構造化理論における基本的な視点となる。また後者の3次元図式とは、第1に解釈図式を使用する行為、その相互行為であるコミュニケーション、その条件であり帰結でもある有意味化される意味規則の組織化された集合体、第2に手段（資源）を使用する行為、その相互行為であるパワー、その条件でもあり帰結でもある支配化（不均等化）される資源の組織化（配分化）された集合体、第3に規範を使用する行為、その相互行為であるサンクション、その条件でもあり帰結でもある正当化される規範の組織化された集合体、以上の3次元が設定された行為・相互行為と構造の関連図式である。

しかし、構造化理論はたんに社会が人間をつくり人間が社会をつくるという至極当然な視点を提示しているだけでもなければ、3次元図式が構造化理論の内容のすべてを尽しているわけでもない。それらは基軸ではあるがそこに多岐にわたる肉付けがなされる。90年の『アンソニー・ギデنز；合意と論争』に収録された「構造化理論と社会学的分析」には、構造化理論と社会研究の関係が簡潔にまとめられており、構造化理論の基本的な視点や概念が

24) Giddens (1976) と Giddens (1979) とでは用語などに相違があるが、ここでは後者に依拠している。

いくつか提示されている²⁵⁾。まず原則的なものとして、他者の現前と不在、条件についての可知と不可知といったコンテクスト、意図的帰結と非意図的帰結との絡み合い、制約性と可能性が挙げられる。要するに社会学的分析が構造的条件を重視すべきだということだ。そしてそれは一方的に行为主体を条件づけるのではなく、知る、意図する、可能になるという側面によって主体性が維持されるのである。

そして次に、実践の再生産、コントロールの弁証法、言説的浸透、二段階の解釈学が挙げられる。社会学的分析の対象となる社会現象は、人々の行為、相互行為である。それらの行為すなわち実践はいかに再生産されるのか。当然、構造的条件からの作用である。しかし、そのような条件のもとで主体的な行為がなされ相互行為が展開される。実践の再生産とは行為の規則性、反復性を示すとともに、その変容をも含意する。また、相互行為において人々はコントロールしあう。どのような主体も資源をもつ。すなわちパワーをもつ。したがって相互にコントロールする関係になる。これがコントロールの弁証法と呼ばれるものだ。最後に言説的浸透とは、たとえば主体が構造的条件を言語的に明確に表現しつるということである。知ってはいるが言語的に表現できないという実践的意識ではない。知っていなてなおかつ言語表現でできることが重要だ。それはパワーの基盤でもある。

さて、構造は規則と資源のシステムとして把握されるのだが、それに対する批判に対して彼は『現代社会の社会理論』に収録された「批判に応えて」において、構造概念になんら変更を認めないと応答する²⁶⁾。規則と資源から成る構造概念が抽象的すぎて分析的概念として価値が少なく、構造は人々の関係として設定される方が適切だという批判に対してギデنزは、それは社

25) ギデنز自身がいくつかの機会に構造化理論の要点をまとめているが、ここでは最新のものを採用している。ギデنز自身の紹介はたとえば Giddens (1981) に見られるが、それは宮本 (1984a) や今枝、前掲書で紹介されている。

26) ギデنزの構造概念への批判のいくつかはすでに今枝、前掲書の第2章「構造化理論とその批判」で紹介されているが、今枝は批判の根拠を検討しないままにその批判に賛意を表している。

会システムであり、構造とシステムを区別することこそ重要だと反論するのである²⁷⁾。また、規則概念批判に対しては、規則には構成的規則と規制的規則があり、それが解釈図式と規範であるということ、構造セットや構造原理はそれ自体が規則ではなく、2つの規則と資源が相互媒介的に結合した構造の基本的なありかたであること、構造を形成するパワーとその基盤である資源が重要であること、構造概念を言語モデルにヒントを得てはいるが、それに尽きるものではなく資源概念が中心であり、しかも言語モデルは構造主義的なものではなく、むしろ発話行為に焦点があること、などが反論として述べられている。

構造概念についてさらに重要な点は、規則と資源によって定義することに尽きるわけではない。『社会の構成』で示されるのは、文字通りミクロからマクロなレベルに至る社会の複合的な構成を把握するための概念、枠組、視点である。次章でも示すように、さまざまな社会的な場が存在し、それぞれに時間・空間のコンテクストがある。その条件下でそれぞれの場において行為主体が規則や資源を使用して行為し相互行為する。場ごとに構造が成立しており、それが再生産される。特にマクロな場においては結社、組織、運動などから成る変動分析の図式が適用される²⁸⁾。

構造の再生産は行為・相互行為によって実現されるが、その前提にある行為主体の意識についても議論は深められており、それは91年の『モダニティと自己アイデンティティ』にまで一貫している。行為主体の意識についてギデنز²⁹⁾は79年の『社会理論の最前線』において無意識、実践的意識、言説的意識という3層構成によって把握するようになった。言説的意識とは言語化された意識であり、それは行為選択に反省的に作用する。それに対して無

27) 本文で後述するようにギデنز²⁹⁾はシステム概念を社会関係に限定して狭い意味で使用する。

28) この図式は Clark et al. (1990) 所収のギデنزの論文「構造化理論と社会学的分析」の中の「システムと変動」でも再確認されている。

29) unconsciousness, practical consciousness, discursive consciousness.

意識は主体にとってコントロール困難な内的条件である。そして構造の再生産にとって重要なのが実践的意識である。言語化されなくても知っているということはある。むしろそれが主要な意識である。構造を再生産する実践は、たとえ構造を言語化できなくても構造を知っている実践的意識によって生み出されるのである。

もちろん行為主体は構造を把握しきっているわけではない。無意識もそうであるが、主体にとって未知の条件は多い。それは行為に作用して主体の意図とは違った帰結をもたらさせる。それは構造を変動させる。しかし、意図せざる帰結はあくまでも行為の帰結であって、構造機能主義のいうような行為原因となるものではない。すなわち機能要件が行為を生み出すわけではない。それが言説的意識、実践的意識によって把握されていれば別であるが、無意識として作用することはないし、行為をすべて機能要件に貢献を帰結するものとみなすことは誤謬である³⁰⁾。

意識の問題との関連における構造化理論の基本概念として、二段階の解釈学についても述べておかねばならない。二段階の解釈学は前章で述べたように76年に提示された。社会学の対象となる社会現象を構成している行為主体である人間は、それぞれ意味づけられた状況の中に生きている。すなわち意味の解釈図式を駆使して生きている。これを認識主体が再解釈する。だから二段階の解釈となる。同じ解釈では必ずしもない。社会科学が見いだす意味づけは、すでにそこで生きている人間にとって意味づけられているものであることが多い。言語化されていないだけの場合もある。ともあれ二段階の解釈学とはそういうことだ。

『社会学の新しい方法規準』の実証主義批判、主観主義評価、そして二段階の解釈学の視点だけを見ると、ギデنز社会理論に認識論を求めるむきがあるのも無理はないかもしれない³¹⁾。また、彼の認識論が不十分であるとか、

30) この点は1970年代以来ギデنزに一貫しており、注20の論文の中の「機能と意図」でも再確認されている。

彼はガダマー解釈学やフランスのポスト構造主義の議論を誤解しているという批判がある³²⁾。しかし彼自身が言うように「認識論に特に関心があるわけではない」のだ³³⁾。構造化理論はいわば基礎的な存在論なのである。二段階の解釈学もその文脈で位置づけられることになる。それはたんなる認識の方法論ではなく、主体の意味を重視する基礎的存在論であり、認識成果(知識)の存在論であり、これが反省性の議論に連結していく³⁴⁾。さらに、認識の存在拘束性を過度に主張するポスト構造主義の主張を斥け、絶対的な相対主義を拒否する。構造化理論は存在論、二段階の解釈学は認識論、両者は別個の議論だなどといって簡単に済ませていては³⁵⁾、構造化理論と二段階の解釈学の関連を見いだすことはできないだろう。

第1に、ある社会現象については、それを構成している当事者がよく知っているという視点である。これは行為主体は状況を、さらには構造的条件をよく知っているということにほかならない。よく知りえているからこそ、構造を維持ないし変化させて再生産できるわけであり、これは構造化理論の要点の1つである。もちろんすべてが知られているわけではなく、無意識もあれば未知の条件もあるが、行為主体である人間は規則構造や資源配分構造を言説的意識や実践的意識において把握しえていると設定されるのである。

第2に、認識主体は社会学者だけではないという点だ。当事者である行為主体もまた認識主体である。相互に意味を解釈しあい意味を表現しあっている。これは3次元図式の中の1つの次元であるコミュニケーションに該当する。なぜなら、解釈には意味づけ規則を使用するからであり、解釈は意味づけ規則の把握を目指すからである。二段階の解釈学はそこにも見いだされる。二段階の解釈学が存在論であるというのはそのためである。しかし、存

31) 今枝, 前掲書もその典型例である。

32) たとえば Held and Thompson (1989) 所収の Susan Hekman や、『ギデنزの構造化理論』所収の Roy Boyne の論文がそうである。

33) Clark et al. (1990) p.300.

34) 宮本 (1991a).

35) 今枝法之「書評に答えて」『ソシオロジ』第36巻第1号, 1991年6月。

在論的意義はそれだけではない。認識・知識の存在様式についての議論もなされている。その要点は解釈が解釈に作用するということにある。認識主体によって再解釈されたこと、発見された意味は、行為主体によってさらに解釈される。それによって行為主体は新たな意味づけを可能にする。この場合、認識主体が当の行為者と同じ場合、それは反省とよばれよう。自分が反省によって意味を発見する場合もあれば、他者による解釈から学ぶ場合もある。こうして解釈された意味は行為主体に再解釈されることによって新たな行為を生み出す。社会的広がりの中での反省である。二段階の解釈学は反省と同義であるのだ。近代社会の反省的意識としての社会学のありかた、批判理論としての社会学の基盤がここにある³⁶⁾。

構造化理論において設定される相互行為の中でも重要なのがパワーである。この意義については次章で議論するが、その要点の1つが前述したコントロールの弁証法とギデنزが表現する視点だ³⁷⁾。パワーを行使しあって相互に自己の目標達成、意思実現を目指してコントロールしあう。なぜ弁証法かといえば一方向的なコントロールではないからである。いかなる行為主体もパワーを保持する。コントロールは双方向的なのである。弁証法の相互対立、対立物の相互浸透、統一という特性がそこに見いだされるからである。

以上の中に社会学原論としての多大な意義を見いだせよう。次章でまとめるように構造化理論の意義はまさに社会学原論としてのものであり、人間と社会の基本的なありかたを把握した基礎的存在論、ミクロからマクロに至る社会構成を把握したマクロ社会理論、中心概念にパワーを設定して展開される社会理論などがその主なものであるが、かといってそれは経験的研究に貢献しないわけではもちろんない。

36) 批判理論についてのギデنزの簡潔な総括として Held and Thompson (1989), pp.288-293.

37) Giddens (1973) 以来、ギデنزはこの概念を愛用している。なお、宮本 (1987) で述べたように相互行為の次元を示す概念としては、ギデنزの使うパワーよりはコントロールの方が適切である。

89年の『現代社会の社会理論』所収のギデنزの「批判に就いて」には構造化理論と経験的研究の関係が次のように述べられている³⁸⁾。構造化理論は経験的研究のためのヒントを与える視点、枠組にすぎず、そこにすべてを求め批判するのは正しくない。まるごと応用され、それが検証されるといった理論ではないからである。例えば婚姻研究の場合でいうと、男と女が構造的条件のもとで相互行為によって関係を形成し、それを確固たるものとし維持発展させたり、あるいは解消したりしていく社会過程は、構造的条件としての諸制度とそれらの複合、それによる相互行為の制約、男と女がその制度的構造を前提にそれを再生産するダイナミクスとして分析される。制度化された実践の再生産、制度的構造の変動の要因が分析の焦点となるのである。

構造が行為・相互行為の条件であり帰結であるという点を、経験的分析との関連で具体的にさらによく示すのは階級構造化の理論枠組である。構造化理論の概要を説明するのに76年の『社会学の新しい方法基準』から出発するケースが多いが、構造化理論の原点は73年の『先進社会の階級構造』にあり、そこに経験的社会研究との関連も一層具体的に示されていたのである。

そこでギデنزが目指したのは階級構造を先験的に設定する立場を否定し、それを経験的に確認するための指標を明示することにあつたのであるが、同時に人々の行為、相互行為、社会関係を通じて初めて階級構造が成立するという構造化の基本的アイデアが明確にされた。階級構造は条件として行為、相互行為、社会関係に作用するが、そのような行為、相互行為、社会関係の形成こそが階級構造を維持し変動させるという視点である。そして生産の場、消費の場における階級間社会関係の形成ばかりではなく、階級内関係の再生産、階級間移動の開放あるいは閉鎖の程度、政治エリートや経済エリートという支配エリートと階級との関係（補充、連帯など）が構造化の要因として摘出されたのである³⁹⁾。

38) Held and Thompson (1989), pp.297-300.

39) 階級構造化理論の要点と構造化理論との関連については、宮本(1981)が Giddens (1973) に基づいて示した。

ギデنزの階級構造化の理論の構築を通じて、構造化のアイデアを確固たるものにしたが、それを一般理論、原論として展開していく契機となったのが、実証主義批判、主観主義の社会理論についての再検討であった。それを通じて、階級構造化の理論を特殊形態、下位形態とする一般的な構造化理論が形をとりはじめたのである。構造化理論の基本的内容をなす3次元は階級構造化の枠組と重ねあわせることができる。階級意識、階級制度、階級支配がそれだ⁴⁰⁾。しかも前述の中心概念の1つコントロールの弁証法もすでに登場していた。階級構造化の理論こそ構造化理論の原点であり、経験分析との接点を例示するものなのである。

3 社会学原論としての構造化理論の意義

構造化理論についての評価はイギリスにおいても分かれている。意義を見いだす論者と批判する論者が組み合わされて構成されている『アンソニー・ギデنز；合意と論争』にもそれはよく示されている。ここでは構造化理論をめぐる議論の全面的な検討の準備作業として、社会学原論としての構造化理論の積極的な意義を、筆者の立場からまとめておくことにしたい。

第1に、基礎的存在論としての基本図式の意義である。ギデنزも言うように、構造化理論は社会学の対象となる社会という存在に対する基礎的な視点を提示するものである⁴¹⁾。それをここでは基礎的存在論とよぶが、その特性は構造は行為・相互行為にありという視点、すなわち構造の二重性にほかならない。そして前章で示したように、さらに構造と行為・相互行為の基本的要素の明示によってその視点は内実を得る。この図式は以下に示す通り、基礎的存在論としての社会学原論にとって普遍的意義をもっているのである⁴²⁾。

社会学の対象となる社会現象は人々、すなわち諸個人・諸集団の個人的・

40) 階級意識がコミュニケーションの次元に、階級制度がサンクションの次元に、階級支配がパワーの次元に対応している。宮本(1981)。

41) たとえば Bryant and Jary (1991), p.201.

42) この段落と以下の3つの段落は宮本(1986)と(1991a)に基づいている。

集合的行為，それらの相互行為によって成立している。社会学にとって基本的に実在するのはまずそれである。その条件として何があるかが次の問題となる。それをいかに設定しうるか，そしてその条件と行為・相互行為の関連をどう設定するかが，原論あるいは基礎的存在論の質を決定するのだが，行為とその条件の内実をギデنزの3次元図式は，あますところなく見事に把握していると言える。一般的に言って，行為の条件はまず外的条件と内的条件に分類できる。行為主体の心的状態が内的であり，外的とは自然的条件と社会的・文化的条件である。そしてこの社会的・文化的条件の設定が，原論ないし基礎的存在論の要石となる。それを価値・規範，資源配分，他者との関係として設定すれば，基本的にすべてを網羅したことになる。なぜか。

価値・規範とは，社会的に成立している意味づけ規則およびそれを基盤に成立する行為規則である。価値とは対象に意味を見いだすことにほかならない。正負含めてそうである。規範はいかに行為するかの様式を規制する規則である。広い意味では意味づけ規則であるが，たんに意味解釈，意味構成の規則ではなく，社会的に「すべきである」ないし「すべきでない」という規則である。両者は相互に転換しうる。すなわち意味解釈規則が規制的になる場合もあれば，規範が建前ではなく本音にちかいものとなり意味づけ規則となることも多い。だからこそ価値・規範と列記されるのだが，その区別もまた重要なのである。ギデنزはそれを把握していた。だからこそ解釈図式・コミュニケーション・有意味化と規範・サンクション・正当化の2つの次元が設定されたのである。それらにおいて共同意味，共同規範が形成され，それが維持され，あるいは変化する。

次に資源配分は行為の手段の配分である。規則によって行為のありかたは意味づけられたり規制されたりするが，行為を現実構成しているのは手段の使用ということにほかならない。行為とは手段使用過程である。では手段とは基本的に何か。実のところあらゆるものが手段となりうる。しかし基本的には他者に作用するための手段と，物的な対象に作用する手段とに分けら

れる。それらは相互媒介的に動員されるのだが、基本的には区別されるのである。すなわち、共同意思を形成する過程において他者をコントロールする手段と、共同生産の遂行において動員しうる物質的手段に区分されるわけである。なお、これは1章でも触れた政治的パワーと経済的パワーとの区分にもつながっていく。

そして、価値・規範および資源が使用されるのは社会的な場、すなわち他者との関係においてである。行為や相互行為の条件には、価値・規範の構造と資源配分の構造とならんで具体的な他者との関係もある。他者との関係にそれらの構造が現れるともいえるし、その関係において構造が再生産されるともいえる。ギデنزはこれを構造とシステムとの区分によって押さえている。彼の言うシステムは他者との関係、諸個人・諸集団の間の関係であり、それが示すパターンそれ自体は彼が強固に主張するように構造ではないのである。

社会関係から成るシステムは構造的特性を示す。しかし、構造機能主義のようにそれをそのまま構造として設定しない。構造は実体化された社会関係ではない。システムすなわち関係はダイナミックに変化する。多様な可能性をはらんでいる。パターンはあるが具体的な存在だ。そのパターンを一般化し抽象化したところに構造が成立する。しかも構造も固定化されない。構造は行為、相互行為によってのみ確定される。構造化という概念は構造のダイナミックスを示す。また前章で述べたように、構造が強固な条件であり、虚像的な存在でもあるというパラドクシカルな性格もギデنزを押えている。

以上のように、3次元の内容的設定にしても、構造の位置づけにしても、行為・相互行為と構造の関連づけをなすべき基礎的存在論として構造化理論はほぼ要点を押さえきっている。構造は意味規則のシステム、資源配分のシステム、規範のシステムであり⁴³⁾、社会関係のシステムを形成する行為・相

43) ギデنزはシステムをパターン化された社会関係に限定して構造とシステムを区別するが、ここで筆者はシステムを一般的概念として、ギデنزのいうシステムを社会システム、構造を規則や資源の組織化された秩序ある集合体という意味↗

互行為を拘束するとともにそれらを可能にもする。強い作用力をもつが、決して実体的な存在ではなく行為、相互行為においてのみ維持される。したがって変革もされるというわけだ。

社会学原論は以上にとどまらず、さらに展開される必要がある。その方向はいくつかあろう。拙稿で取り掛かったような3次元図式を厳密化していくという方向もありえたが⁴⁴⁾、ギデنزはそれを選択していない。彼が選択したのはミクロからマクロに至る社会諸レベルにおける行為・相互行為と構造の関連づけを行うことであった。その成果は『社会の構成』にまとめられており、構造化理論の第2の意義は、そこに展開されているミクロレベル、メゾレベルの分析をも含み込んだマクロ社会理論に求められる。そしてその意義はさらに2つに分けられる。1つは、社会諸レベルの構造化の複合としてのマクロ社会の構成という視点であり、2つには、運動というマクロな行為と社会変動の関連づけの視点である⁴⁵⁾。後者は80年代に展開された一連の社会変動論、国家論においてさらに具体化されており、資本主義、産業主義、監視、暴力の4つの制度的クラスターから成る近代国家の構造と運動が関連づけられた。

第1の意義とは何か。ギデنزの主体、行為・相互行為とミクロないしメゾの構造、マクロな構造と行為・相互行為をそれぞれ設定している。用語法としては構造概念をマクロに限定している点是否定できないが⁴⁶⁾、ミクロやメゾレベルにも構造が成立するという補助線を引けば社会構成は鮮明となる。構造はミクロからマクロに至る様々な場に成立しているのである。

まず出会いという語がある⁴⁷⁾。具体的な日常生活の場である。主体が平凡な市民であるか、大企業の経営者であるか、政府の首脳であるかにかかわら

✓での規則システム、資源配分システムと定義する。

44) 宮本 (1986)。

45) 宮本 (1988b)。

46) Giddens (1984) の内容構成に明らかである。

47) この段落と次の段落は Giddens (1984), pp.41-161 に基づいている。

ず、人々はこのような日常的な場に生きる。そこでは主体は無意識、実践的意識、言説的意識、そして反省的意識をもちながら相互行為する。現前する他者、不在の他者といった他者との関係でそれぞれの位置が決まり、その関係の中で行為が選択される。多くの行為・相互行為は慣習化され日常化し、ある種の連続性の上に信頼感が醸成される。そこには社会統合とよばれる構造が成立する。共存在の構造とも表現されているものだ。

それらの場は複合してさらに大きな場をつくることがある。ある1つの場にとって他の場は構造的条件となりうる。そしてそれらの場の複合体としてマクロな社会が成立する。異質な場の接合、複合、併存というシステムである。それぞれのミクロな場の社会統合は、場が拡大すれば成立しがたくなり、それに替わってシステム統合が成立する。それぞれの場において構造はコンテキストとして作用する。時間と空間がコンテキストを形成する。地理的空間に時間の流れに沿って主体は存在し行為する。空間は主体にとって表局域でもあれば裏局域でもある。時間の流れは主体にとってどうしようもない条件だ。これらの場は同時に成立してマクロな社会構成を作り上げている。

もう1つの運動および国家パワーないし支配パワーといったマクロな行為の強調は、マクロな構造化を把握するために必然であった。すでに拙稿で論じたところであるが⁴⁸⁾、そこにマクロ社会理論の展開の方向が求められている。すなわちマクロな構造に対応するマクロな行為を設定しようとするれば、そこに出てくるのはマクロな主体とその行為であらざるをえない。その1つが国家パワーおよび支配的な経済パワーであり、他の1つが運動なのである。前者が既成の構造を支配化というかたちで構造化するものであるとすれば、運動は構造を変革しようとするものであるといえよう。なお、この、マクロ構造化の理論枠組の前提には、前章で示した階級構造化のそれがあることを忘れてはならない。諸集団・諸集群の間に展開するダイナミックな社会過程を把握するマクロ社会理論の中に階級構造化の理論枠組が吸収されていると

48) 宮本 (1988a)。

みなすならば、マクロ社会理論の内容に一層のふくらみを与えることができるのである。

構造、運動、変動という関連づけはマクロ社会理論の中心問題である。日本ではすでに70年代半ばに塩原が明解に示したところが⁴⁹⁾、やや遅れてイギリスでもギデنزがその点を強調しているのは興味深い。ともあれ『社会の構成』と翌年の『国民国家と暴力』以来、ギデنزは運動概念を一層重視するようになった。繰り返して言うように、それは反省的意識にもとづく行為、社会の反省的意識の表現としての運動である。そして社会学もそれと同じ意味をもつのだ。批判理論としての社会理論がそれである。そこに運動と社会学の出会いがある。91年の『モダニティと自己アイデンティティ』ではライフ・ポリティックスにかかわる運動にまで言及されるに至る⁵⁰⁾。

そして、マクロ社会理論の展開においてパワー概念が重要となる。このパワー概念の中心性こそが構造化理論の第3の意義である。パワー概念の中心性はすでに76年の『社会学の新しい方法規準』にも手段ないし便益、資源といった概念との関連で示されていた。すなわち主観主義や機能主義の意味づけ規則と規範の強調では不十分で、マルクス主義のパワー概念の強調から学ぶべきであるが、かといって経済的パワー偏重では弱いという判断だ。パワーこそ基本図式の中心にある。3次元は並列されているからパワーの中心性は認められない⁵¹⁾、といった内的関連づけの欠落した表面的な解釈では、構造化理論の意義を見逃してしまわざるをえない。行為は規則と資源が相互媒介的に動員される過程にほかならず、ギデنزはそれを明確に把握しえているのである。

このパワー概念の中心性、あるいはその前提にあるマルクス主義批判がギデنزを『唯物史観の現代的批判』に向かわせたのである。それは経済的パ

49) 塩原勉「理論社会学における若干の基本問題」『社会学評論』第100号、1975年。

50) Giddens (1991), pp.209-31.

51) 今枝「書評に答えて」(注35参照)

ワーにとどまらない政治的パワーの分析に深く関与するものであった。国家論がさらに展開される『国民国家と暴力』が刊行されたのも当然である。伝統的国家、絶対主義国家、そして近代国家、現代国家という歴史的発展が、現在の国民国家および世界的な国民国家システムを形成するに至っているというマクロな把握がなされ、現代社会とくに先進社会では、経済的パワーが資本主義と産業主義という2つの次元で作用し、政治的パワーが監視と暴力という2つの次元で作用しているという図式が提示される。まさにギデنزの国家論はマクロなパワー分析の展開なのである。これを「国家論は、権力のみならず、監視、暴力、資本主義、産業主義などのそれぞれ還元できない近代の多次的連関において議論されている」⁵²⁾というように解釈するのは完全な誤解なのだ。監視、暴力、資本主義、産業主義においてこそパワーすなわち権力が作用しているのであって、これらとは別の次元に権力なるものが成立しているわけではない。そのような解釈では権力とは一体何なのか全く答えることができないのである。

ギデنزがパワー概念をマクロな権力を指示するためにのみ使用していない。もちろん運動もパワーなのだが、それだけではなく基本的にパワーは行為能力として把握されていたのである。『社会学の新しい方法規準』でパワー概念が重視されたのはまさにそのためであり、それは『社会理論の最前線』でさらに強調された。現実変革能力ともいうべきパワーは、基本的には行為能力なのであり、それが集合化されると運動やマクロな支配パワーとなるのである。行為能力からマクロなパワーに至る社会の諸パワーを視野に収めた社会学原論としてのパワー論の基礎を、彼は構築することができたと言えよう⁵³⁾。

52) 今枝「書評に答えて」(注35参照)

53) 宮本(1984b)。

お わ り に

本稿はギデنزの構造化理論の展開、要点、意義を、最近の構造化理論研究やギデنزの著作を視野に入れた上で、簡潔に明示することを目指した。社会学原論としての構造化理論に焦点を合わせたので、ギデنزの著作の豊かな内容を汲み尽くせてはいないが、その全体像を把握するために必要な社会学原論としての構造化理論の意義は明示できたと思われる。

構造化理論はギデنزの著作の駆動軸となっている。理論と実証のゆるい結び付きにいらだつ人々はそれを批判するが、増殖し疾走するギデنز社会理論は批判者を振り切る。そこに意義と可能性を見いださない批判のための批判は無意味だ⁵⁴⁾。70年代前半の階級理論にも80年代に展開された国家論にも、マクロ構造化の視点が貫徹しているし、90年代の著作に示されるモダニティ分析、現代のアイデンティティ分析、親密性分析などにも構造と主体的意識をおさえきろうとする意欲がみちあふれている⁵⁵⁾。モダニティの構造的條件、それとの関連で形成されるパーソナリティ、アイデンティティ、親密な関係。そこには構造と行為主体との相互浸透の把握が見られるのである。構造の二重性という視点は、ギデنز社会理論の展開の基盤として作用し続けていると言えよう。

今後なすべき課題は当然ながら多い。さまざまな論者によるギデنز研究において提示されている多様な論点をさらに検討しなければならないし、なによりもギデنزの著作をさらに深く検討する必要がある。ただし、ギデنزの著作や多くのギデنز論を十分に生かすためには、単なる紹介に止どまることなく、社会学ないし社会理論の構築の積極的意図を持たねばならな

54) 厳しく批判するにしても Craib (1992) のように、全体にわたって丁寧に読解するならば学ぶべき点は多い。

55) 親密性の分析は1992年4月に刊行予定の *The Transformation of Intimacy: Love, Sexuality and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press. で行われるようだが、すでに Giddens (1991) でも部分的に遂行されている。

い⁵⁶⁾。本稿が社会学原論としての構造化理論の要点と意義を検討したのは、まさにその課題に応えるためだったのである。

参考文献一覧

ギデنز著作リスト（単独著作のみ。カッコ内の数字は刊行年）

- Giddens (1971) *Capitalism and Modern Social Theory*, Cambridge University Press. (犬塚先訳『資本主義と近代社会理論』1974年, 研究社)
- Giddens (1972) *Politics and Sociology in the Thought of Max Weber*, The Macmillan Press. (岩野弘一・岩野春一訳『ウェーバーの思想における政治と社会学』1988年, 未来社)
- Giddens (1973) *Class Structure of Advanced Societies*, Hutchinson. (市川統洋『先進社会の階級構造』1977年, みすず書房)
- Giddens (1976) *New Rules of Sociological Method*, Hutchinson. (松尾精文ほか訳『社会学の新しい方法規準』1987年, 而立書房)
- Giddens (1977) *Studies in Social and Political Theory*, Hutchinson. (宮島喬ほか訳『社会理論の現代像』1986年, みすず書房)
- Giddens (1978) *Durkheim*, Fontana. (『デュルケム』)
- Giddens (1979) *Central Problems in Social Theory*, The Macmillan Press. (友枝敏雄ほか訳『社会理論の最前線』1989年, ハーベスト社)
- Giddens (1981) *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, The Macmillan Press. (『史的唯物論の現代的批判』)
- Giddens (1982a) *Profiles and Critiques in Social Theory*, The Macmillan Press. (『社会理論の諸相と批判的検討』)
- Giddens (1982b) *Sociology: A Brief but Critical Introduction*, The Macmillan Press. (『社会学入門』)
- Giddens (1984) *Constitution of Society*, Polity Press. (『社会の構成』)
- Giddens (1985) *Nation-State and Violence*, Polity Press. (『国民国家と暴力』)
- Giddens (1987) *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press. (『社会理論と現代社会学』)
- Giddens (1989) *Sociology*, Polity Press. (松尾精文ほか訳『社会学』而立書房, 1992年)
- Giddens (1990) *The Consequences of Modernity*, Polity Press. (『モダニティの

56) Cohen (1989) はその1つのモデルである。

帰結』)

Giddens (1991) *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. (『モダニティと自己アイデンティティ』)

ギデنز論リスト (英文単行本のみ。カッコ内の数字は刊行年)

Cohen (1989) Cohen, I., *Structuration Theory: Anthony Giddens and the Constitution of Social Life*, Macmillan Educational Ltd.

Held and Thompson (1989) *Social Theory of Modern Societies: Anthony Giddens and His Critics*, ed. by D. Held and J.B. Thompson, Cambridge University Press. (『現代社会の社会理論——ギデنزとその批判者たち』)

Clark et al. (1990) *Anthony Giddens: Consensus and Controversy*, ed. by J. Clark, C. Modgil and S. Modgil, The Falmer Press. (『アンソニー・ギデنز——合意と論争』)

Bryant and Jary (1991) *Giddens' Theory of Structuration: A Critical Appreciation*, ed. by C.G.A. Bryant and D. Jary, Routledge. (『ギデنزの構造化理論——批判的評価』)

Craib (1992) Craib, I., *Anthony Giddens*, Routledge.

拙稿リスト (ギデنز論およびそれに準じるもののみ。カッコ内の数字は刊行年)

宮本 (1981) 「階級理論の新展開」『大阪大学年報人間科学』第2号

宮本 (1984a) 「社会理論におけるパワー論の位置」『大阪大学年報人間科学』第5号。

宮本 (1984b) 「構造化とパワー」塩原勉編『社会学の理論Ⅱ』日本放送出版協会。

宮本 (1986) 「相互行為の基本類型」『桃山学院大学社会学論集』第20巻第2号。

宮本 (1987) 「階級分析の中心問題」『桃山学院大学社会学論集』第21巻第1号。

宮本 (1988a) 「国家の社会学と二つのパワー」第21巻第2号。

宮本 (1988b) 「マクロ社会理論の展開と基本方向」『桃山学院大学社会学論集』第22巻第1号。

宮本 (1990) 「性差問題と社会学」『桃山学院大学社会学論集』第24巻第2号。

宮本 (1991a) 「社会学における認識論的問題」『桃山学院大学社会学論集』第25巻第1号。

宮本 (1991b) 「暴力の社会学」『桃山学院大学社会学論集』第25巻第2号。

Giddens' Structuration Theory: Development, Points & Significance

Kouji Miyamoto

Anthony Giddens, a modern British sociologist, has published many books, and there are many studies about Giddens' social theory. His social theory is constructed overtly or covertly on the base of structuration theory. This paper aims to show its development, points and significance as a preparatory study for examining his social theory and many studies about it.

First, the development of structuration theory is depicted; from class structuration theory, via general social theory to macro social theory which is developed as a critique of Marxism, theoretical constitution of society, theory of nation-state and analysis of modernity.

Second, referring to his recent papers, we summarize its points; duality of structure, three dimensions of interaction and structure, double hermeneutics, macro-structuration, its relation to empirical research and so on.

Third, we can find its significance in three forms of sociological primary theory; basic ontology which grasps elements of social reality, macro social theory which contains articulations of social locales and macro-structuration, and power theory which is constructed by many kinds of powers from micro-level to macro-level.